

われら信濃川を愛する「信濃川自由大学」

第9回 火焰土器が伝える縄文人にメッセージ ～ 信濃川に出土する火焰土器～

日 時：平成18年6月20日（火）13:30～15:30

会 場：長岡商工会議所・大ホール（長岡市）

ゲスト：小林達雄 氏（新潟県立歴史博物館館長）

ホスト：豊口 協 氏（長岡造形大学理事長）

（司 会）

皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、我ら信濃川を愛する「信濃川自由大学」を開校いたします。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私、本日の司会・進行を務めさせていただきます灰野亜矢子と申します。どうぞよろしく願いいたします。

信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、毎回信濃川にゆかりのあるゲストの方々から様々なお話をお聞きしております。来月は三条、その後は燕、新潟での開催が予定されておりますので、是非、ご参加いただきたいと思います。

なお、過去の講座に関しましては、信濃川自由大学のwebページで議事録を公開しております。お手元の資料にアドレスを記載しておりますので、そちらからご覧ください。

それでは、はじめに主催者を代表いたしまして、信濃川河川事務所長・宮川勇二よりご挨拶申し上げます。

（宮 川）

皆さん、こんにちは。信濃川河川事務所長の宮川と申します。信濃川自由大学につきましては、昨年10月から開催いたしまして、毎月1回のペースでやらせていただいているところがございます。当初5月までの予定だったのですが、もっと続けてほしいというご意見もございましたことから、6月以降も引き続きやっていくということで、今回6月を迎えたわけがございます。

毎回、地域の方から楽しいお話を聞かせていただいているところがございますけれども、今日はホストに豊口先生、それからゲストとして小林先生をお迎えいたしまして、火焰土器が伝える縄文人のメッセージということで、なかなか興味深いテーマでございますので、信濃川の歴史に触れながらいろいろ楽しい話題をお聞かせいただけるのではないかと期待しておりますので、皆様方、2時間、よろしくお付き合いください。今日はどうもありがとうございます。

（司 会）

ありがとうございました。それでは、第9回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは「火焰土器が伝える縄文人のメッセージ～信濃川に出土する火焰土器～」です。本日はゲストスピーカーに、新潟県立歴史博物館館長の小林達雄様をお迎えしています。

ホストは豊口協・長岡造形大学理事長が務めます。まず、お二人のプロフィールをご紹介します。

小林達雄先生は昭和 12 年長岡市出身、國學院大學大学院博士課程修了その後、東京都教育庁文化課、文化庁文化財調査官を経て、昭和 53 年、國學院大學文学部助教授、昭和 60 年、同文学部教授、平成 2 年、考古学研究の業績が評価され、浜田青陵賞を受賞、その他、アメリカウイスコンシン州立大学、カナダブリティッシュ・コロンビア大学、イギリスケンブリッジ大学等で在外研究、21 世紀 C O E プログラム、國學院大學拠点リーダー、國學院大學図書館長を歴任、現在、國學院大學文学部教授・歴史学博士、新潟県立歴史博物館館長でいらっしゃいます。最近の著書として「世界のなかの縄文～対論、佐原真・小林達雄」など多数ございます。

豊口協先生は昭和 8 年、東京都出身、昭和 59 年から平成 4 年まで東京造形大学学長、平成 6 年に長岡造形大学学長に就任、現在は理事長でいらっしゃいます。この他、G マーク審議委員会委員長、信濃川では大河津可動堰改築検討委員会委員でもいらっしゃいます。代表的な作品は、昭和 45 年の大阪万国博覧会の電気通信館、昭和 60 年のつくば国際科学技術博覧会の東芝館など、そして皆様ご存じの長岡花火ネクタイのデザインから世界のデザインへと幅広く活躍中でいらっしゃいます。

それでは、小林先生、豊口先生をお迎えいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。それでは、ここからの進行は豊口先生にお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

(豊 口)

今日は大変貴重な 2 時間をいただいております。これから、私たちふるさとの誇りでもある信濃川と縄文時代の火焰土器を中心に、2 時間たっぷり勉強してまいりたいと思います。最初に、時代的な流れを皆さん方と一緒に理解していきたいと思います。縄文時代というのは 13000 年くらい続いているのです。非常に長い間、日本の文化を形成してきた経過があるわけですが、その中でも信濃川と深いかわり合いを持っている。縄文時代の前にいったいどんな人間が住んでいたのかということも私自身よく分からないものですから、その辺を共通の話題として一度確認をしておきたいと思うのです。日本の歴史は 2700 年とか 2600 年とか言っていますけれども、そんな短い期間ではなくて、かなり古い時代の話です。それを確認して、それから小林館長のお話を伺ってまいりたいと思っています。

(小 林)

縄文文化の幕開けは、分かりやすく言うと 15000 年前くらいです。それ以前に旧石器時代文化というのがあります。

(豊 口)

実はこういう感じになっていて、ここで終わっているのです。900 年前からは弥生になるわけですね。この 15000 年より昔の旧石器時代を作った日本人は、いたのですか。

(小 林)

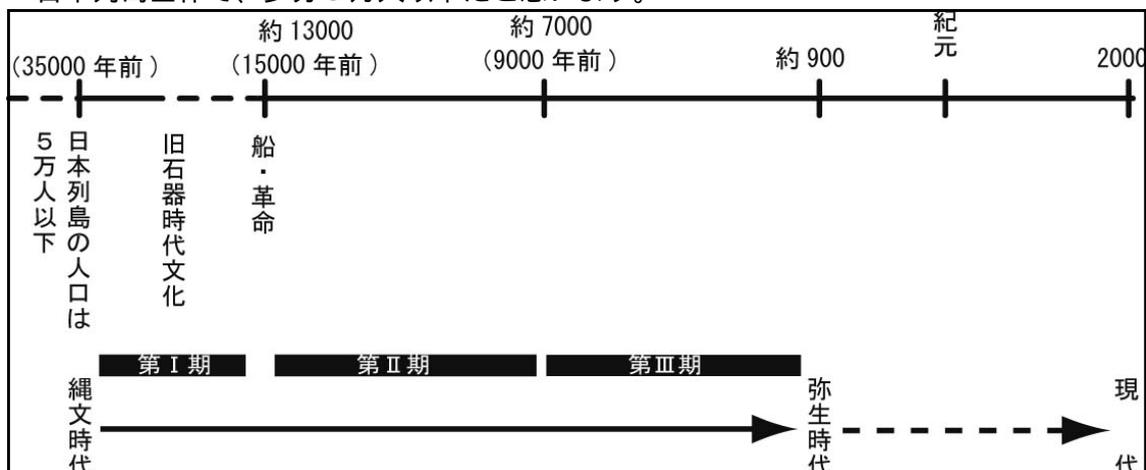
35000 年くらい前まで確実に遡ることができます。

(豊 口)

この時代、何人くらいいたのですか。

(小 林)

日本列島全体で、多分5万人以下だと思います。



(豊 口)

今は1億2,000万人ですから、大変なものですね。そうすると、この時代の前にも日本民族がいたと、その人たちは大陸から渡ってきたと考えていいのですか。

(小 林)

そうですね、日本列島でボウフラのようにわいたわけではなくて2本足で、ナウマン象とかマンモス象とかオオツノジカだとか、そういう連中の尻を追いかけながら渡ってきたわけです。

(豊 口)

日本海がまだ海になっていない前のはなしですか。

(小 林)

何回か陸の橋ができたりしますから、そのチャンス、隙を見計らって動物がやってきます。それを追いかけて来たのです。

(豊 口)

ということは、日本人のルーツというのは北から来た人もいれば、西から来た人もいれば、南から来た人もいると解釈していいのですか。

(小 林)

そうでしょうが、詳しいことは何とも分かりません。

(豊 口)

その辺は不明ということですが、とにかく35,000年くらい前には日本人を形成する人間が日本列島に住んでいたということがわかりました。この頃は、日本海側に住んでいたのですか、太平洋側にもいたのですか。

(小 林)

全域です。だから、35,000年くらい前くらいには北海道から九州、それから種子島というところまで行き渡っています。しかも、遺跡の数が多いのです。世界各地の旧石器時代の遺跡に比べると、つまりそれだけ遺跡が多いということは、正比例していたということはそう簡単に言えないのですけれども、ほぼ比例して人口も多かったと考えていいと思

ます。だから、日本列島というのは 35000 年前くらいには世界の中で最も人口密度の高かった時代で、これは重要なことでして、人口密度が高いということは、非常に活力にあふれていたという可能性があるのです。

(豊 口)

そうしますと、日本海側でそういう人たちが生活をしながら、舟を通して文化の交流があったということも事実だと考えてよろしいでしょうか。

(小 林)

舟を操ることができるのは 15000 年前くらいを前後した頃なのです。その前からもちろんうまく海流に乗ってというようなこともあったようですけども、活発ではなかった。だから、陸橋をつたってやって来た。あるいは冬の寒い時に氷が張って、海峡を渡ることができるような状況を見計らってやって来るわけです。

(豊 口)

それで、弥生時代というのがここにあるわけですけども、弥生町から出た弥生土器、関東ですけども、関東からは縄文時代の土器は出ているのですか。

(小 林)

たくさん出ています。

(豊 口)

というふうになっているわけですが、ここまでの時代的な流れで何かご質問はありませんか。こういう点は、もうちょっとははっきりしておきたいとか。

それでは、早速、今度はお話を伺っていくことにします。今日の話は火焰土器なのでですけども、我がふるさとの素晴らしい土器、これは信濃川周辺の流域にしか出ていないのですが、その時代の我らが祖先であります古代人というのはどういう生活をしていたのか、特に川と一緒に。

(小 林)

すぐに本陣に突入ということになりましたけれども、豊口先生から実はこんなに分かりやすい、私も確認するために大変いい 1 本の線で表していただいて、大変ありがたいと思っております。先生、実は盲腸を手術されて、ついこの間、出てきたのです。まるで少年のような体験をこのお年で経験されたということで、しかし、こんなにお元気になられた。あそこに立ってまでやっていただきまして、これで十分先生はこれからさらに羽ばたいて行かれるという様子が見られて、大変うれしく思います。

それはそれとしまして、縄文時代の始まりは 15000 年前、私はそれを縄文革命と呼んでおります。縄文革命というのは、日本列島の歴史上の大事件ということではなくて、それに止まらず、実は人類史上の一大事件なのです。というのは、旧石器時代文化というのが人類の文化の第 1 段階と申しますと、縄文革命以降は第 2 段階と位置づけることができます。だから、15000 年前に日本列島を舞台にして人類の歴史上の一つの道のりとしての第 1 段階から第 2 段階に飛躍した、そういう事件が起こっています。しかも、これは重要なことなのですけれども、15000 年前に第 1 段階から第 2 段階というのは、世界的に見ても群を抜いて早いのです。例えばどのくらい早いかということでみていきますと、第 1 段階から第 2 段階へというのは、世界各地でだいたいこの道のりにそって歴史は発展してくるわけですけども、縄文列島以外のところでは、今からせいぜい 9000 年前くらいです。

それが 15000 年前というのは、紀元前 13000 年くらいです。ところが、エジプトのナイル川流域とかイラン・イラクのあたりのメソポタミア地域、それからインドのインダス川流域、さらに中国の黄河・揚子江流域、このあたりは皆さんご存じのように、世界の 4 大文明の発祥地です。その発祥地といえども、実はそのスタートは、第 1 段階から第 2 段階という歴史的革命は、だいたい 9000 年前くらいから始まります。大ざっぱに 10000 年と言っても、実は 5000 年も違うわけです。5000 年早いからと言って日本列島の人々が、世界に冠たる優秀な人々がそこにいたのだということで自慢するような話ではないのですけれども、というのは、当時の時間の長さから言ったら、1000 年はせいぜい 10 年くらいと考えてもいいかと思えます。例えば今我々だったら、新幹線が 1 分でも遅れたらイライラするぐらいですから、今の 1 分と当時の 1 分というのは全然違いますから、時間も文化です。そういった意味で、それにしても 5000 年は早くに日本列島が第 2 段階に入った、縄文文化に入ったということは重要なことです。

なぜそんなことが可能であったかということは大問題ですが、そう簡単には答えはまだ出せませんが、一つ状況証拠として押さえておくことができるのは、旧石器時代にも遺跡が多くて、それにほぼ比例して人口も多かったこと、それが縄文時代に入る時には、さらに遺跡は増えてきます。そして、縄文時代に入っても、もっともっと増えていく。そうしますと、世界のどこと比べても人口密度が高かった。それだけ大勢の人たちが顔をつきあわせて、そしてその時代を生きてきた。これはやっぱり大事なことでして、大勢いれば大勢いるほど、いろいろな考えをする人がいますから、全く破天荒な考えをする人が出てきたりします。10 人か 20 人もお互いに目が届く範囲の仲間同士だったら、誰かが言うのにくっついていたりとか、そういうことがよくあることですけれども、大勢いると、目が届かないところで勝手な言動をする人が出て来るわけです。可能性がどんどん膨らんでくる。

(豊 口)

縄文土器というと、縄目の模様がついていますね。私たちが学校で習ったのは、縄目模様をつけたから縄文時代。今までお話を伺っていますと、日本中にそういうことに携わった集落がたくさんあって、それぞれの集落がオリジナルの土器を作る、そういう縄文土器としての代表的な土器はございますか。

(小 林)

村々でそれぞれオリジナルなものを作ると言えば作るのですけれども、地域的にまとまりがありまして、縄文時代はざっと 10000 年以上続くのですけれども、縄文時代全体を見渡すと、ある様式が出てきて、そしてそれがずっと続いて、やがて消滅して姿を消すのです。かわって、また新しい様式が出てきます。そういうようなことを見ていくと、だいたい 75 くらい縄文土器の様式がありまして、それが例えば北海道の東部とか南部、東北、北部というふうに、それぞれ方言のようにある地域のまとまりを示すのです。そういうことを見ていきますと、それぞれのまとまりを示すモザイク状に日本列島を覆っていたのです。それが本当の姿です。

(豊 口)

そうすると、その時代からお互いの交流は何らかの形であったと。

(小 林)

もちろんです。相互の交流がありました。第1段階では食べ物を求めてしょっちゅう動き回っているのです。ところが第2段階、縄文革命以降というのは、1か所に腰を据えて村を営んでいた、これが第1段階との大きな違いなのです。それで、中近東とか中国よりも何が早かったかと言うと、第1段階から第2段階というのは定住的な村を営むのが日本の方が圧倒的に早かった、群を抜いて早かったという事実です。

(豊口)

それで、南北に日本は長いわけですがけれども、現在でも雪国と南の方の生活が違いますね。

(小林)

実はお互いに交流はもちろんありました。交流をするには定住的な村を営むということが非常に大事なことです。定住的な村というのは、そこにおいて日常的な食べ物を十分に確保できるというテリトリーと言いましょうか、生活舞台を確保しなければいけないということなのです。そのために隣の集団と争いをしょっちゅう起こしては困るので、向こうから来るを阻止しながら、こっちからも行かないよと、そうやって定住することによって、それぞれの自分たちの固有の地域を守っていきます。守っていても、例えば資源・食糧にしても、海岸の人たちは海の自然、海産物資源を容易に手に入れることができますけれども、逆に海岸の人たちというのは猪や鹿のようなちゃんとした肉を手に入れるのはちょっと難しい。そこで、交換、交易が起こるわけです。だから、それぞれ自分たちの生活舞台を確保することが、逆に手を結ぶことにつながっていくのです。そうやってつながっていったのが南は沖縄まで、北は北海道、そして北方4島にまで、申し訳ないですがけれども、あれは縄文列島の辺境でして、これは大事なことだと思うのですけれども、全部つながっていった。

(豊口)

樺太も入りますか。

(小林)

樺太は入らないのです。これがまたおもしろいのです。北海道の一番北の宗谷岬から北を望むとくっきりと樺太の丘が見えるのです。ところが、一向に渡ろうとしないのです。そのくせ、津軽海峡は樺太と宗谷岬との間の宗谷海峡よりも安全だというわけではないのに、行ったり来たりしょっちゅうしてしまっていて、津軽海峡を挟んでいつも同じ一つの文化圏を形成するのです。ところが、樺太の向こうに行かない。それはちょっと先を急ぎますけれども、言葉が違います。樺太には行かないというのは、いくらかわいい女性がいっても、話しかけてものにするとするのは言葉が必要ですから、すぐ腕力にものを言わせても困りますので、言葉から入ろうとすると通じませんから、それで渡ろうとしない。それから、向こうからも渡ろうとしない。そのくせ、津軽海峡はしょっちゅう行ったり来たりしています。だから、当時は既に縄文日本語というのがあって、その縄文列島というのがずっと南までつながっていた。

ついでに申しますと、朝鮮海峡においては、対馬までは行くのです。そして、縄文土器を残しているのですけれども、対馬はどちらかと言うと、半島よりに位置しているのです。ところが、半島よりにある遠い海を漕ぎ渡っているくせに、そこから先、ほんのちょっと頑張れば向こうに到達できるし、もっともっと広い世界が広がっているのですけれども、

そこは渡らないのです。向こうからも来ない。これはなぜかと言うと、やっぱり言葉が通じないからだとは私は考えています。

(豊 口)

今、言葉の話が出まして、私はこの分野に非常に興味を持ったのですが、日本にはモンゴルの言葉と満州の言葉と、それから韓国の言葉、日本語というのは文法的に全部共通点があります。例えば韓国は日本と同じように感謝(カムサ)とか安寧(アンニョン)という言葉を持っているのです。それ以外に日本には大和言葉という、きわめて特殊な言葉があります。「ありがとう」というのは、どこの国の言葉にも当てはまらない。そういう言葉の発生というのは、やっぱりここに住んでいた古代の人たちの生活の中から生まれてきたオリジナルな言葉だろうと思うのです。そういうものに対して外来語がどんどん入ってきて、それが並行して日本の言葉文化を作ったということが言えると思うのです。そういう言葉の流れの中で縄文時代の人たちというのは、言葉が入る以前にも、今、先生が渡って来ないとおっしゃったのですが、人的交流があったような気もするのですが、どうなのでしょう。

(小 林)

今、分かりやすくお話ししたのです。行こうと思えば行けるわけですが、渡ろうと思えば、実は渡っているのです。渡っていても、手を結んでともに世界を生きようなんていうことは言わないのです。だから、向こうからも来ているのです。来ている証拠はあるのです。北海道からは黒曜石が行ったりしているのです。そこで、今の先生のお話はおもしろいのですが、言葉というのはある言語学者のグループが、どこかに言葉の中心がいくつかあって、それが枝分かれして様々な現代の言葉につながっているのだという考え方があります。だから、言語年代学というのがあって、何年前に朝鮮半島の言葉と日本の大和言葉が分かれたのかという計算をしたりするのですが、これは私はあまり賛成ではないのです。というのは、言葉というのは5万年くらい前から人類は十分に操ることができたのです。言語中枢もきちんとした形をしています。それから、2本足で突っ立っていますから発声を十分にコントロールできまして、無限の発音ができるわけです。だから、いろいろな言葉の違いというのは、発音の違いとしても我々は耳にすることができるわけですが、そのようにどんな人たちも最初から言葉を持っています。例えば下北の猿と丹後篠山の猿はいまだかつて交流したことがない、話し合いをしたことがないのです。だけど、丹後篠山の猿も言葉を持っている、それから下北の連中も言葉を持っています。だから、最初から、そしてそれが共通してくるのは、その後の往来が何回も何回もあったわけです。1回や2回ではなく、何回も何回もそういうチャンスがあった中で同じ言葉を共有したり、あるいは向こうからお借りしたり貸したりというようなことが起こって共有した。それを逆にとらえて分かれてきたというのは、ちょっと違うのではないかと考えています。

(豊 口)

言葉もそれほど複雑になっているということは、実際にそういう人たちが作った土器に関していろいろな要素が交流の中から生まれてきているという感じが私はするのですが、この10000年以上の歴史の中で、歴史博物館で拝見しますと、底がとんがった土器とか平たい土器とか、いろいろ時代によって違ったものが生まれているわけですが、そういう土器というのは、そこで生活するための一つの道具としての機能が生かされてい

るのだらうと思うのです。その辺はいかがですか。

(小 林)

土器は極めて重要な道具の一つです。形を見ると分かるように、土器というのは入れ物なのです。ものを出し入れすることのできるものです。だから、形が様々ですけれども、底があって口が開いた、入れ物の機能を持った粘土製の道具です。それと、先生のお話のように、あれは単に道具、こんな新しい道具を手に入れたということだけではなくて、ものすごく重要な意味、あるいは歴史的な効果をもたらしたというのは、実は日本列島で作り始めた縄文土器というのは、基本的には九割九分煮炊き用です。だから、煮炊き用に土器を使っていた。煮炊き用に使うことによって、生では食べられないようなものを火を通すことによって食べられるようにしたのです。だから、ものすごい食糧資源の開発に役立ったのです。食糧資源の開発に役立ったということは、それだけ食糧事情が安定してくる。そうすると、生活全体が安定してくる。十分に文化的な活動を展開する基礎が、土器を使っている煮炊き料理が基本になることによって保証されたと、こういうふうに見ています。

(豊 口)

ちょっと素人的な質問で申し訳ないのですが、底がとんがっている土器がありますが、あれが一番安定しているのではないかと思うのです。地面に突き刺して周りから火を燃やせばいい。底がフラットになった土器というのは、下に置く釜といいますか、ベースがしっかりしていないとひっくり返ってしまう。そういう点から考えると、一番最初はとんがっているものから生まれたのですか。

(小 林)

だいたいそうですが、そう一概には言えないのです。というのは、造形的にはとがった底の中心点からずっと同心円状に展開する、上に壁を立ち上げていくというのが造形的には一番簡単なのです。ところが、平らな底を作って壁を立ち上げて、口もそれに合わせてやるというのは歪みが生じやすいのです。ところが、1点の中心からずっと立ち上げると、これは造形的に安定した形になります。それと、豊口先生の大事なご指摘の、このテーブルの上には丸い底とかとがった底は困りますけれども、わざわざ突き刺さなくても、地面といいましょうか、彼らの生活環境の中での平面にはフラットなものはないのです。凸凹しています。凸凹している方が、先が小さいものの方が安定するのです。逆にこういう平底だと、凸凹していたら傾いて不安定になってしまうのです。だから、これではちゃんとならない。底がとがっていれば、ちょっとした窪みでも安定するということで、造形的には底がとがっているという造形学的な意味と、もう一つは、生活環境の中での平面というのはどういうものかということを考えると、入れ物としては今の目で見ると不安定なようだけれども、十分にそれは安定していると。

(豊 口)

その時代の土器というのはほとんどが手ひねりで、おそらくロクロはなかったのではないかと思うのですが、その辺はいかがでしょうか。

(小 林)

おっしゃるとおりです。ロクロが出てくるのは古墳時代です。弥生土器もロクロではないのです。あんなに薄くてロクロでやったかのように見えるのですけれども、実は全部手づくりです。粘土紐をずっととぐるを巻くようにというのがあることはあるのですけれど

も、本来は一番普通のやり方というのは、1段ずつ帯状に積み重ねる輪積みなのです。こうやっていくと、どこで止めていいのか分からない。だから、1段1段をきちっと接着させながら上に積み上げていく。

(豊 口)

それぞれ時代によって土器の作り方がかなり変わってきているわけですが、そういう土器の中で実際に料理をした日本人の先祖。おそらく日本列島にはかなり豊かな食べ物があったのでしょ。特に周りが全部海に囲まれていますから、海の魚もって料理をしたのだらうと思います。海の食料、山の食料、この辺の違いに対して土器はどういうふうに機能していったかというのは、学問的にはお分かりになるのでしょうか。

(小 林)

豊口先生のような人に考古学をやっていただくと、あるいは説明が先に進んだのかもしれないのですが、そこまで具体的にはないのですが、貝塚地帯の土器には、ある時期に底が小さくて、非常に特殊な形の深鉢があります。口が平らなのです。これは大量に出てきます。丁寧に作った土器に対して荒削りな土器を粗製土器と呼びますが、そういう粗製深鉢がいっぱい出てきます。これは多分貝類を入れて煮沸することによって口を開けさせて、それでむき身を作って、大量に処理して、それを干したり薫製にしたりということです。それに対して陸や山の方は、貝の処理はしていない。ですから、そういう土器のタイプは、内陸の方にはないのです。普通の煮炊き、おそらく越後の方ではごった煮、ああいうのが普通だと思うのです。しかし、これも注目すべきことなのですけれども、縄文時代というのは土器の量がすごいのです。これだけ土器の量が多いということは、いつも食事というと煮炊き料理がメインディッシュだったということを物語っています。そういうことでして、その中にはごった煮で山菜の類、肉の類、そういうものをごった煮したのではないかと、栄養学的なことを彼らは意識していなくても、いろいろなものを食べることによってバランスをうまくとるといようなことです。

(豊 口)

しつこくて申し訳ないのですけれども、今の人たちはお鍋料理をしがりますよね。縄文時代の土器を拝見しますと、蓋に類するようなものがなかなか見えないのですが、その辺はいかがですか。

(小 林)

そこまで先生はよくご覧になっていますね。蓋はほとんどないです。ただし、新潟県の信濃川流域には、後で火焰土器の話が出るとおもいますが、火焰土器の次に三十稻場式土器、これは馬高遺跡のすぐ隣が三十稻場遺跡で、ここの遺跡から出た土器を標識に使っているのです。ここの土器は蓋を一生懸命作るのです。これはめずらしい土器です。縄文土器全体の歴史を見ましても、ほかに北陸地方の縄文時代がそろそろ終わるとい晩期にも、蓋があります。だから、蓋がないわけではないのですけれども、土器の蓋は極めて少ない。しかし、その中で越後新潟県のもは、全国の土器の中でもユニークなものを使っています。だから、今でもありますが、植物の茎や蔓で編んだ蓋とか、ああいうものがあったのではないかとおもいます。けれども、これは日本列島は特に酸性が強くて、酸性土壌の下では有機質のものは酸化してしまひまして、残らないのです。だから、土製の蓋はめずらしいけれども、ないことはない。だから、きっと土製の蓋でない時には、代わるべ

き植物製蓋があったのではないかと推定することができます。

(豊 口)

分かりました。だいたい縄文時代の土器の作り方、それから土器をどう生活の中で活用していたかということが、だいぶ固まってまいりました。実は今、館長さんの方からお話がありましたけれども、信濃川・越後の地域に我々が誇りにしております火焰土器というのがあるわけです。私たち素人から見ますと、何でこの越後の信濃川の流域周辺にしか火焰土器が出てきていないのか、先ほどからお話がありましたように、日本中に縄文時代に人々が住んでいて、それぞれ独自の文化を作ってきたわけでありまして。この火焰土器と我々が呼んでいる土器は、越後の我々のふるさとにしかないわけです。なぜこういうものがこの地域から生まれたのか、この辺が一番知りたいところなのですが。

(小 林)

これはとても興味深い問題なのですが、確かに火焰土器というのは越後・新潟の地域、ちょうど新潟県の県境、線引き通りの県境ではなくて、ちょっと出入りがありますが、ほぼ新潟県の今の地域です。だから、新潟県の地域というのは遡ると、古代の越後・佐渡が下敷きになっています。古代の越後・佐渡というのはどこから出てきたかと言うと、実は火焰土器の頃なのです。だから、新潟県というのは何でああいう形をしているのかというと、これは火焰土器の分布圏なのです。

しかも、なぜここに出てきたかということについては我々にも難しいのですが、想像を交えながらお話ししてみますと、実は縄文時代は 10000 年以上続くわけですが、長いものですから、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と六つの時期に分けています。縄文文化が幕開けしてから徐々に人口が増えています。そして、増えては減り、増えては減っているのです。しかし、それをならしていくと右肩上がりの増加をしています。こうやって草創期、早期、前期と進んできて、中期に入って火焰土器が誕生します。火焰土器というのは中期の最初からでて来るのではなくて、初頭には別の土器様式なのです。この土器様式は新保新崎(シンポニンザキ)式と言いまして、越後から越中あたりまでずっと一つの文化圏といいましょうか、土器様式圏です。だから、同じ仲間として土器様式を共有していたのですけれども、その次の段階になると越後は独自の非常にユニークな動きを展開するのです。結論から言えば、火焰土器を発明するわけです。その時には越中の連中とたもとを分かちます。向こうは向こうで、火焰土器にやや似ているのですけれども、違う様式を作ります。越後で火焰土器が出てきます。おもしろいことに火焰土器の前身というのがもちろんあります。一番古い段階からあるのですけれども、その古い段階の前に気配があるかと言うと、ほとんどないのです。おもしろいことに、まったく突然のように火焰土器が生まれてくるのです。実は縄文土器は 75 様式あると申しましたけれども、ほとんど大部分の土器様式というのは、登場する時には何か前のものを引きずっているのです。火焰土器はほとんど引きずっておりません。突然出てくるのです。これはおかしいことなのですが、出てくる前夜が、越中富山の連中と手を結んで同じ土器様式を作っていた連中は、一方では鼠ヶ関の方から東北の方につながる大木(ダイギ)式土器様式というのを知っているのです。一部大木式土器様式の浅鉢土器を取り入れている。火焰土器の前は、新保新崎式というのは浅鉢土器がちょっと苦手だったのです。だから、ちょうどいいのが東北にあるものですから、それをそのまま拝借しているのです。つまり行き来もしているし、

向こうには大木式土器様式というのがあるのだということを十分に承知している。

それから今度だんだんこっちに来ると、群馬のあたりに関東の印旛沼から利根川流域、そして群馬県あたりまで広がった阿玉台（オタマダイ）式土器というのがあります。そういう別の様式があります。それも知っているのです。湯沢方面に入ってきています。それを知っていて、それからまたこっちへ来ると、今度は魚沼の方の信濃川流域をずっと越後の本拠地なのですけれども、その向こうには勝坂（カツサカ）式土器様式というのがあるのです。これがまた優秀な土器で、そういうのを知っているのです。一方、さらにこっちへ来ると、たもとを分かった北陸の方では、また力強い個性的なものがある。つまりどういう状況におかれていたかということ、一緒に越中富山と二人三脚でやってきたのに、独立する時に越中富山と一緒にやっていた人たちと同じ土器様式をまた踏襲するのではなくて、独立するのです。その時にまったく新しい土器を発明した、それが今ちょっとくどくどお話ししましたけれども、周りに様々な土器様式があるということを承知して、どっちにも偏らないで、どつちの真似もしないで、それらの情報をいっぱい持っている。そして、まったく新しい土器を生み出したというのが火焰土器です。

（豊 口）

今の時代に是非、そういう哲学を持った人たちが生まれていれば、新潟県もすばらしい県になっているような気もするのです。その時代にそういう独創的なものづくりの時代があったということは、今から考えますと、想像を絶するものがあるのです。しかも、さつき館長がおっしゃったように、日本中に縄文時代の土器は大変な数が出ている。しかし、この火焰土器に限っては、かなり限られた所にしか出ていない。

（小 林）

そんなことはないです。無尽蔵にというわけではないですけれども、新潟県、越後の範囲内ではみんな火焰土器を作っていたのです。それで、西一番の端っこは糸魚川、そしてその先の親不知を越えると富山県側に、1個、2個、3個と数えるほどしか出ていません。しかし、こっち側はがっちりと火焰土器がまとまっています。村上から北の方に行くと山形県に入ると、縄文時代からの線引きなのです。それは方言だとかは今始まったことではなくて、縄文時代以来の歴史の中で方言が固まってくるのです。だから固まるというのは、その辺からもう境目があったわけです。村上まではあります。佐渡もそうです。そして一方では阿賀野川を遡ると、最初に火焰土器を作る時には会津地方も仲間だったのです。ちょっと違うのですけれども、それなりの個性があるのですが、それでも全体としては火焰土器の雰囲気を持っています。ところが、次にこっちが伸びようとする時には、また東北の大木式を作り出すのです。ところが、越後の本体は引きずられないで、堂々たる火焰土器を作りあげた。

（豊 口）

先ほど土器というのは生活のための煮炊きの道具だとして説明がありました。この火焰土器は素人目で見ますと、どうも煮炊きには合わないような気がするのですが、その辺はどうなのですか。

（小 林）

これが縄文土器の真骨頂です。我々が見て、こんなので煮炊きしてと、現代人の感覚から言うとそう思うのが普通なのです。だいたい煮炊きというのは食材を入れて煮炊きをす

るわけですから、あんな大仰な口の部分が四つ飛び出ていて、これは入れるのもうっかりしたら手を引っかけるかもしれない。ちょうど食べ頃だと言って取り出すのに突起があったら、じゃまでしょうがないのです。ところが、煮炊きに使っています。その証拠は、例えば土器の上の方と、これは復元していますけれども、底に近い方の火を受けたところと色が違っていています。それから、中に食べ物の残りかすが炭化してこびりついています。これで年代測定をやったりするのですけれども、火焰土器というのは普通に鍋釜用に使っていた。そして、我々の感覚から言うと、こんなものをわざわざ鍋釜用に作るのはおかしいじゃないかというくらいに気に入って作っています。だから、現代のプラスチック製品のようなものとは対極に



ある。そして、これだけのものでも煮炊きに使っているという、これが縄文の豊かさといましようか、今この部屋は使用料を取るらしいですけれども、長方形の空間ですから、この空間ではおもしろくないのです。だから、ガウディみたいなのは縄文心でおもしろいのです。我々がこれにならされたというのは、いけないことだと思います。ヨーロッパの教会を見るとすごいです。あれはあんなにすごくなくてはいけないという理屈は一つもないのですけれども、そうしないではいられないような造形的な、デザイン的な環境の中で自分たちが生きてきた。ものもそうです。これは突起があったら飲みづらいのですけれども、飲みづらいからと言ってやめたら、これはどこの家庭でもあるし、飲み屋にもあるし、これではおもしろくない。縄文土器をちょっとデザインして、四つは多いかもしれないけれども、縄文土器の突起を一つくらいつけてもいいと岡本太郎だったら言うかもしれないです。

(豊口)

ということで、今、気に入ってこういう新しい時代をその当時の人は作ったというお話でした。これはやはり若いというか、子どもたちにはとても作れない。かなり腕力もいりますし、精神的な強さも必要だと思います。これを私は初めて見た時に、それまでは本で見えていたのですけれども、その時まではああ、そうかと理解していたのですが、長岡へ来まして実際のものを見た時に、ものすごいショックを受けたのです。これはすごい。印刷物で見ていた自分が恥ずかしくなりました。何かが私に対して呼びかけてくるという情念みたいなものを感じまして、改めてすごいなと思ったのです。おそらくこれを作った人というのは成人になって、新しい自分が人間としてスタートする時に、神に対して自分がこういう人生をこれから歩むのだと神に誓って作ったような気もするのです。そういう意味では、祈りの心がこの中に込められているし、ここから作った人のメッセージが私たちに今でも伝わってくる。美学というのは、作った人のメッセージが器の中に入っている。お茶の茶碗を作った人の美学が、あの茶碗の中に込められている。それを使った人の美学がその中に込められて、今でも利休のお茶碗はこうだということが伝わってくる。それにも

勝るとも劣らないほどのメッセージを受けたのです。その辺は、その時代の我々の先人達がそういう精神構造の中で作っていたのかどうか、大きな疑問を持っています。

(小 林)

縄文土器というのは、非常に装飾的であると、豪華絢爛であるという表現でしばしば評価をすることがあります。弥生土器と比べると、あれは装飾性が低い。実用的な機能一点張りだと対照的に見ているのですけれども、縄文土器というのは装飾ではないのです。飾りではなくて、土器の存在そのもの全体が装飾と器としての機能とに分離できないのです。例えばこの会場で、壁紙を貼ったり、あるいは色を塗り替えるといくらでも模様替えできるのです。いくらでも壁というのは加工できるのですけれども、実はそれのできるのは弥生土器なのです。形態と紋様とか装飾というのが分離できるのです。ところが、この火焰土器は器の形から装飾的な要素を剥がすことができるかと言うと剥がせないのです。剥がしたら全部壊れてしまうのです。これが縄文土器の秘密なのです。力の持つエネルギーというのがそこにあるのです。それを先生は美学とおっしゃいましたけれども、そういう表現もあたるかもしれないし、あるいはまた別の言葉を借りれば、例えば彼らの世界観を表現しています。だから、器を作ればいいというのではなくて、世界観をあそこに託しているのです。装飾ではなくて、実は世界観そのものなのです。あの形、そして口縁部のところにある突起、あの形も全部同じなのです。これは彼らのこれではなくてはいけないという世界観の表れなのです。そして、それをもうちょっと平たく言うと、実は火焰土器にはいろいろな要素があるのですけれども、全部その要素が有機的にと言いましょか、てんで勝手気ままに取り入れられているのではなくて、このモチーフはこの場所と決まっているのです。つまりこれは言うなれば、物語みたいなものです。この土器を見ると、彼らはこれに託した彼らの世界観から生み出された物語を表現しているのです。だから、村上の方から糸魚川の方まで、そして津南町の方まで、阿賀町の方まで、高田の方まで、そこに生きた縄文人は全部同じものを作るわけです。これを造形的にこの土器の様式が流行しているから真似しようとしたら、もっと変化が起こっていいのです。ところが、非常に規格性が高くて遊びを許さない。もちろん一つ一つ手づくりですから、見た目に移る感じは個性がありますけれども、それは個性であって、例えば誰々さんが昔々という時の語り口がおばあさんごとに調子が違うように、そしてそれに味があるように、実は縄文土器、火焰土器もそうなのですけれども、同じ物語を表しています。非常に大事な、そしてこの規格性を揺るがさないということは、そういう彼らの世界観の中から生み出された物語が安定した、そして誰もが理解していた物語であったに違いない。だから、装飾には物語性の装飾と装飾的装飾とあるということになれば、縄文土器というのは物語性のものであるということになるわけです。

(豊 口)

私はこの土器を拝見して時間を感じたのです。普通、こういうものを見ますと、形にこだわって作っていると解釈しますけれども、火焰土器を見た時、古代人が過ごした時間的な経過を感じたのです。昔よく言われたように、時間、空間、建築、要するに空間と時間というのは一体となって宇宙、それが新しい建築の基本的な考えであると言われるわけです。この土器を見た時に時間と空間、これがおかれたその時代の人たちの生活空間、そういう小宇宙とその人たちが生活した実際の生活空間、その中に時間的な軸を1本通してい

と、そういう哲学的な印象を私は受けたのです。やはりその時代の人たちがそこまで考えてこの土器を作ったということ、日本全体を見たときも、越後のその土器を作った人たちの生き様というのはすごかったのではないかと。

(小 林)

縄文土器も各地にそれぞれ方言があるのと同じくらい各地に特有の様式があるわけです。その中でも縄文土器は代表的なものです。造形的におっしゃるとおり揺るぎのない形、こんなものをよくもひねり出してくれたと、それも前触れがないのです。前触れがないかわりに火焰土器が私たちに贈って送ってくれたメッセージとしてはすごく大事なものと。

(豊 口)

作っていた人たちの環境といいですか、自然環境もそうだと思いますが、なぜ主に信濃川の流域にしか存在しなかったか、この辺が私としては非常に大きな疑問があるのです。どうしてもそれが知りたいという気がしているのです。何かヒントはございますか。

(小 林)

ほぼ雪国に重なっています。山脈で遮られていますけれども、特に他地域と違うのは雪国という点です。だから、雪国に生まれて育つと、例えば冬なら冬の雪が降らない地方とは違った行動が必要とされます。今だったら雪かきも必要だし、屋根の雪下ろしが必要なように、これは雪国でない人はまったく経験しないことです。そういった経験を共有するという一つのまとめ、これが非常に重要ではないかと思います。

それともう一つは、ある程度中核的な地域があって、それでどんなものでもそうなのですが、どんぐりの背くらべ同志の寄合い状態は不安定なのです。やっぱりピラミッド型の構造というのは、それなりの安定さを示します。だから、この越後にはいくつかの中核地帯、その一つが信濃川、これは間違いないです。信濃川集団みたいなものが力を持って、そして周辺に影響を及ぼした。その周辺に及ぼす範囲が、越後の雪国の範囲です。ほぼ重なるというのは、偶然ではないと思います。

(豊 口)

こういうものを作った時に、最初に作るのだと声をかけた人がいるんでしょうね。

(小 林)

多分いるのだらうけれども、私たちが対象としている縄文時代、その後もそうですけれども、個人を特定することはできないのです。だんだん歴史が新しくなると、歴史上に登場してくる主役には個人が出てくるのです。今だったら小泉首相がしょっちゅうパフォーマンスをやっていきますけれども、そういうふう動くのですけれども、その前は集団であったりということになって、そしてその前は、さらに地域の越後集団、ようやくその中の信濃川集団とか、そのぐらいにしか絞りきれないのです。これはやむを得ないことです。ところで、人間の創造性というのはどこから出てくるのか、集団が口を開いたら同じことを言い始めたのか、誰かが言ったのを小耳にはさんでというのか、それは分かりませんけれども、そのあたりはあまり詰めると袋小路に入ってしまう。例えば長岡で消雪の装置、水を撒いて雪を消すというもの、あれは誰が発明したか分からないのです。俺だ、俺だという人がいるわけでもなく、誰も名乗りを上げないのです。だけど、突き詰めていくと、あなたのところ及早かったのではないの、そうかもしれないという程度です。ところ

が、我々は特定しようとするのです。頑張れば分かるのではないかということと、頑張っても分からないという、あんなにすごい発明なのに、誰かと名乗りも上げない。だから、あれと個人の名前は結びついていない、不思議なことです。

(豊 口)

いよいよ核心に入ってくるわけですがけれども、信濃川との関係はどうですか。

(小 林)

やっぱり縄文人というのは狩猟もして、それから山野の植物性の食糧も大いに利用しています。それから、海岸だったら貝だとか魚だとかの魚介類を主に利用しています。内陸だと、特に信濃川あたりでは鮭が非常に重要なものだったと思います。この間、魚沼の奥の黒姫洞窟から大きな鮭の背骨が出て、それを復元すると、80センチメートルくらいになるのです。小さな川なのです。調査がまだ続いていますけれども、そこから出てきたのが鮭なのです。そこまで上っているのです。今は環境が悪化して、特に発電所用のダムが造られて、鮭にとってはとても具合の悪い信濃川になりましたけれども、それでもまだ上っています。性懲りもなく頑張っているのです。その鮭は、例えば江戸時代だったら、北越雪譜にあるような魚野川から信濃川から、すごい鮭が来るわけです。そのすごい鮭は上ってくる期間が非常に短いのです。短いけれども、濡れ手に粟みたいなものなのです。頑張れば頑張るほど、いくらでも捕れるわけです。いくらでも短期間のうちに捕れるということが非常に大事なことで、その日の食事に間に合えばいいというのではなくて、その後、1年分のもので捕れるのです。だから、捕れる時に徹底的に捕って、それを乾燥したり薫製にしたりして保存するのです。そうすると、冬は雪に閉ざされて、山野に食べ物がなくなるのです。ところが、秋に捕った信濃川をはじめとする川に上ってきた鮭で悠々と食いしのごことができる。そして、一番資源のない冬の雪の時、新鮮なものもない時、一番食糧事情が安定している。その時に彼ら自身の文化の見直しとか体系化とか、そういうことをやる時間を保証してくれたというふうなみていいのではないかと思います。だから、信濃川が火焰土器を生んだという、一つの火焰土器的なここ独自の形を生んだ。他のところも特質をみんな持っていますけれども、この土器は代表的な、素人でも、造形にそれほど関心をもたない人でも、ちょっと心が揺り動かされるような、それだけのものを作りあげたという謎がそこにあると思います。

(豊 口)

素人的で申し訳ないのですがけれども、この土器を見た時に、精巧さと大きさもそうなのですがけれども、これだけのものを作りあげるといのは、相当精神力が強くないとできな

い。それから目的に対して土器を作ることは手段なのですから、何か大きな目的があったのではないかと思うのです。これを先人達が作っていた時代というのは、信濃川というのは大変な暴れ川であった。おそらく東山、西山の両側を含めた数キロ口にもわたるような大きな川であった。それが雨季の場合にはほとんど土砂をくずして流れてくる。昔の話に「大和のおろち」がありますけれども、鉄砲水で流れてくるわけです。そういう暴れ川が日本にたくさんあったのです。特に信濃川は大変な暴れ川だったのではないかという気がするのです。



今でも日本海の冬の景色を見ていると、雨季のこういう状態の時の信濃川は相当荒れた状況の時代があったのではないかと思います。そういう点から考えても、この火焰土器の模様を見ていると、信濃川の荒れ狂った水の流れのような印象も受けないわけではない。その時代の人たちは暴れ川に対して、神に対してとにかく鎮めてもらいたい、静かになってほしいという祈りもあったのかなという気がするのですが、その辺はどうですか。

(小林)

自由にイメージを膨らませていただくのは結構だと思いますので、それぞれの世界をお作りいただいた方がいいと思います。今の豊口先生のお話で、滔々と流れる信濃川、本当に夕立のあとは、あの力強さにほれほれとします。もちろん暴れています。そして、それは航空写真にかつての川の道が出てきます。本当に豊口先生のおっしゃるとおり暴れていました。だんだん人がコントロールして土手に閉じこめて、ここだけしか流れてはいけないうと。この間、刈谷田川が決壊しましたが、ああいうこともあったし、信濃川ももちろん危なかったようでしたけれども、そんなのは当たり前前で、今必死になって人工的に止めているのですけれども、そういう川の流れを見詰めて生きていたことは確かなのです。それと造形とどう結びつけたのかは、大勢いると、豊口先生のような考えを持つ人もいたかもしれません。だから、おもしろい発想で、俺はそうじゃないという人も出てきてもよろしいと思います。

(豊口)

私はこの火焰土器を見て、考古学に非常に興味を持ったのです。それは興味を持つということだけなのではなくて、この時代背景をベースにして古代人が作ってきたものづくりの世界、様々な文化的な遺産をどう解明していくかというのは大変なことだったろうと思ったのです。今は科学的に時代を測ることができるわけですが、そういうものができなかった時代というのは、一つの憶測の中で時間系を遡りながら議論を構築していく。ですから、想像の世界で一つの体系を作りあげていくという、暗中模索のような学問の世界だろうと思うのです。しかし、そこにすばらしいロマンがあります。そのロマンを持った人たちが、ロマンを追求しようと思っている夢見る人たちが、こういう考古学というものを作っていったという気がするわけです。そういう点で、今の人たちに夢を与えてくれた

先人達の造形物というのはすごいなと思いますし、特に越後の国にこういうものが生まれたということは、やはりこれからの将来、越後というのはかなり大きな可能性を持っているということも示唆してくれているのではないかという気がするのです。そういうわけで、現在でも火焰土器というのは存在して、我々に一つの方向性を与えてくれているわけです。この間からも館長が中心になってやっておられます「信濃川火焰街道連携協議会」では、縄文時代を象徴する火焰土器を中心にした新しい文化的な組織を作って、それを後世に伝えていこうという運動をされています。その辺は、先人が遺してくれた宝物をどうこれから我々の後輩に伝えていくかという大きな課題が課せられていると思うのです。この辺はご専門としていかがですか。

(小 林)

実はたまたま今日いただいたのですけれども、新潟日報で情報文化というのを出しているのです。ここにちょっと触れましたけれども、縄文土器の造形といいましょうか、この存在を私たちもうちょっと手元にたくり寄せて、そして一緒になってもう一度自分たちの生活環境の中に呼び戻して、共に歩いていくということが必要なのではないかと、地域おこしだとか地域づくりというかけ声で、また新しいものを発信しようということも大事なのですけれども、これだけの内容があって、そしてどっしりとした価値を持った、これを利用しない手はないのではないかと思うのです。

例えばカナダのバンクーバーの空港は、皆さんご存じのトーテムポールを立てた人々の根拠地なのです。空港に降り立つと、もうそこにはトーテムポールを立てた人々の伝統的なモチーフ、彫刻物、三次元の造形として目に飛び込んでくるわけです。町にもそれがあるのです。こういうことは、なるほどバンクーバーでなくては見られないのです。ところが、新潟県というのはおとなしくて、最近、食材だとか、苦し紛れにものを食べればいいというのではなくて、食材に取り組んでいるのです。私もここに来ると、田舎料理を出してくれるところへ行って、多少は飲みますけれども、味を楽しむのです。それも大事なのですけれども、新潟県に入って越後湯沢駅に止まっても、浦佐に止まっても、長岡に止まっても、燕三条に止まっても、新潟駅に止まっても、ここが長岡かなと思って、長岡だから降りる用意をしたのですけれども、改めて長岡の駅名を目で確認して降りるのです。「ながおか」というひらがなを探して。これは私のがっかりです。長岡には長岡の堂々とした火焰土器的なモチーフで駅を飾る。だいたいJR東日本は、そういうところへの配慮がないです。みんな地域を愛さないといけないのに、駅中をどんどん闇市みたいに店を広がっていくのです。これでは大手通がさびれるに決まっているのです。全然反対しないのもおかしいなと思って見ているのですけれども、ご存じかどうか知りませんが、東京では今問題になっていまして、駅中は税金が安いのです。大手通よりも立地がよくて、みんなあそこで抱え込んでいて税金が安いのです。大手通は地価も高いし税金も高いのです。店賃も。そのあたりをもうちょっと頑張って、大手通と喧嘩しないで、もっと違った知的な遊びを、火焰土器伝統を踏まえてあそこに表現してもらおうと、ああ、新潟県に入ってきたな、湯沢なら湯沢に入ってきたなと。湯沢駅は温泉でかわいい女性が湯浴びしていますから、湯沢だなと昔から僕は見ていましたけれども、他の駅には何もありませんか。これは火焰土器をお手本にして、新潟県は新潟県だぞという身構えをしてもらわないといけません。2014年問題ですか、北陸新幹線が開通したら、こっちはさびれるだろうとヒイ

ヒイ言っていますけれども、そんな目先のことではなくて、どっしりと落ち着いて火焰土器を表に出して、今、火焰土器の力を借りなくてはいけないということで、信濃川火焰土器街道の連携協議会というのが長岡、十日町、みんな合併してしまいましたけれども中里、今は一人頑張っている津南とか、三島町もそうだったのですけれども、こうやってそれぞれの自治体が結束して、火焰土器にもう一度目を向けようということで運動を始めたのです。これは長岡の市長にちょっと話をして音頭をとっていただいたらみんなが賛成してくれて、これを信濃川火焰街道ということだけではなくて、魚野川も阿賀野川も入れて、行く行くはずと広げて、新潟空港に行ったら火焰土器がどこかーんとある。だいたいどこの新幹線の駅もおかしいけれども、外に出るとスチール製の変なスズランみたいなのがあって、時間になると音が鳴ったりして、ああいうのは考え直した方がいいと思うのです。百歩譲って、非常に役に立った時期があったと、頑張った時期があったけれども、そろそろもう一度火焰土器を見直そうという時になったら、ただ言葉だけで見直すのではなくて、身体ごとデザイン空間としてもっていったら、よいのではないかと思います。

(豊 口)

私もこの火焰土器を見て感動したのです。火焰土器を生み出した地域というのは信濃川の流域なのですが、今から 16 年くらい前になると思うのですけれども、東側の信濃川の土手に立って沈んでいく夕日を見た時に、こんな美しい夕日が日本にもあったのだということで涙が流れてしまったのです。それほど美しい。こういう美しい自然の中だからこそ、こういう火焰土器が生まれたのだなというふうに結びつけたのです。そういう先人が作ってくれた土器と、それから先人達が生活した自然環境、その中心に信濃川が流れていて日本海に注ぐ、そういうトータルな意味でのこの地域というものをもういっぺん、みんなで見直す必要があるのではないかという気がします。東京にいて新潟県と言うと、やっぱりお米と酒、あとは雪ですか、そんなことしか出てこない。これは当たり前なのです。それはあっていいわけですが、それ以外に実は火焰土器が見えていなかった。火焰土器がこの長岡を中心とする地域に生まれ育ったのだということは、情報としてはおそらく教科書にも書いていなかったし、物の本にも書いていないと思います。まったく情報が伝わっていない。岡本太郎さんから学生時代にいろいろ教えていただいたので分かったのですが、岡本太郎さんがパリの大学で勉強している時に、岡本さんが落ち込んでどうしようもなくなった時にその教授が見せてくれたのが火焰土器だった。これは一体何ですかと聞いたら、お前は知らないのか。これはお前の国の先人が作った土器だと言われて、実は腰が抜けるほど驚いたそうです。帰ってきて、火焰土器が日本にあるのだと言ったのだけれども、誰も見向きもしてくれなかったという時代があったのです。それほど火焰土器というのは、ほんのちょっと前まで人々に注目されるものではなかったのです。これはやはり私たちの責任だろうと思いますし、今住んでいる私たち新潟県人としては大変なことをしてしまった、していたのだという気が私はするのです。こういうものをもう一度見直して、ここにしかない文化の象徴を、一つの誇りとして打ち出していく必要がある。単に観光ということだけを考えたのではだめなのです。今、新潟県でも観光何とかいろいろやっています。食文化、食の祭典というのをやっていますけれども、食というのは日本中というか世界中どこでもあるわけですから、どこにでもあるものを新潟県だけの文化、象徴、食の祭典と言ってみてもあまり魅力がない。しかし、これはここにしかない、ないというもの

を打ち出すべきではないかという気がするのです。それは観光という意味ではなくて、自分たちの誇りとして出すべきだという気がするのです。

そういう意味では、今日来ていらっしゃる皆さんたちと一緒に、この縄文時代の象徴と言われる火焰土器を私たちはどう次の時代に残していくか、このことが大きな課題だろうという気がします。今、信濃川の流域、長岡を中心に火焰土器が出ているのですが、一番最初にこれが見つかったのはどこですか。

(小林)

今、新潟県立歴史博物館の立つすぐそばにある馬高遺跡です。それは昭和 11 年に劇的なドラマが始まるのです。大晦日の夕方になって、これが発見されるのです。これが第 1 号なのです。火焰土器という名前はその頃からあったのではないのです。いろいろあだ名で呼んでいるうちに、火焰土器という名前が定着したのは戦後になってからです。縄文土器はたくさんありますけれども、あだ名を持っている縄文土器は、これが第 1 号です。火焰土器というのはあだ名なのです。だから、先ほど来、豊口先生がおっしゃっているように、水とも関係あるのではないかと、渦巻きと関係があるのではないかというイメージは何人かの方から私も伺ったことがありますし、大変おもしろいと思います。火焰というあだ名は、口の部分が立ち上がっている突起からなのです。突起からきまして、炎を思わせるようなと、その程度の軽い気持ちです。だけど、いったん名前がつくと、あれが炎の形を写したのではないかと誤解する人がいるのですけれども、単なる最初の印象、この土器の形が持つ印象から火焰土器というあだ名が始まったのであって、決して火の炎をイメージして彼らが作ったものという意味ではないと思います。

少し造形的なことをお話ししましょう。火焰土器の突起(鶏頭冠)の裏は、ローマ字の S 字なのです。S 字のこっちのこれを曲げないで、キュッと尻尾を立てるのです。実は縄文時代というのは、土器に世界観を表現したと言いましたけれども、S がものすごい大事な記号なのです。何か世界観の中核に関係しているのです。突起にこの S 字をつけたのです。そして、これがまたおもしろいのです。ここにある窓、どの火焰土器もそうですが、ハート形をしているのです。これはちょっと崩れていますが、ハート形なのです。このこともちゃんと決まっているのです。とにかくこの突起には、この S が隠れているのが非常にデフォルメされているのです。岡本太郎はこれを見て、心臓がひっくり返る思いをしたと言って感動するのです。岡本太郎はぐっと目を見開いて言えばいいのですけれども、我々はそれではだめなので、もっと詳しくこういう謎解きをするわけです。

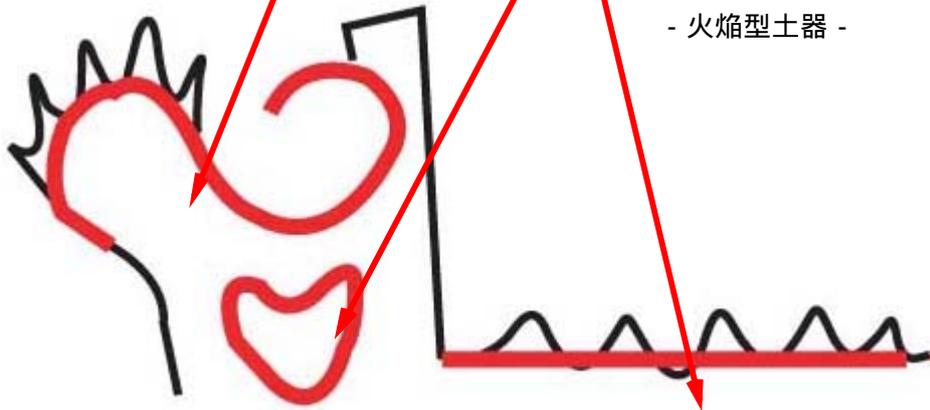
そして、火焰土器というのは一体何が元になっているのかと。ここに袋状の突起があったりします。そういうのがみんな組み合わせあって、桃太郎の話で言えば、おじいさんとおばあさんがいて、桃の中に全部折り込まれている。そして一つの物語を作るのですが、ち

よっとお時間をいただきまして、火焰土器をどう見るか。これもこれも火焰土器様式です。このあたりとこのあたりのかけらを見ると、こっちはあだ名が付いた火焰型土器、火焰型土器というのはその系統です。火焰土器様式、こういうものを生み出した一つの雰囲気と言いましょか、流儀があるのです。火焰土器様式というものを作るぞという流儀があって、その中の一つのタイプが火焰土器であって、もう一つの典型がこれなのです。これは王冠型土器といいます。この王冠型土器というのは、これも

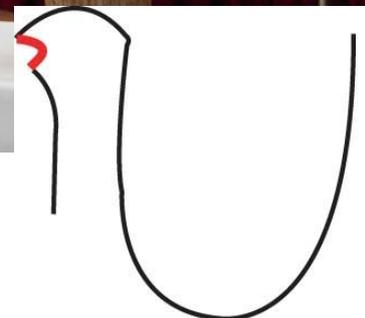
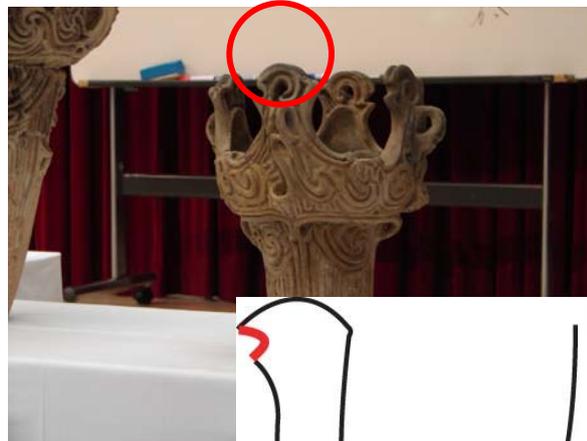


- 火焰型土器 -

また全部規格が決まっています、口縁に短冊形の突起をつけて、必ず短冊形の左に切り込みがあるのです。こういうことは岡本太郎は知らないでも



いいのですけれども、必ずあるのです。火焰型土器が兄なら、王冠型は弟みたいに見える。この二つがあって火焰土器が成り立つのです。概して火焰型に大形品があるのです。とにかく、火焰土器と王冠型と二つがあって、王冠型にはときかみみたいな鶏頭冠突起がないのです。また、王冠型の口縁には鋸歯状のフリルはつかない。そして、火焰型の口縁は水平で、王冠型は波状に大きくえぐれている。この約束はきちんと守られています。そして、しかも両方とも煮炊き用に使うのですが、見た目は、こっちは大きいのと小さいのと相当違いがあるみたいなのですけれども、それこそ雰囲気、今私が解説しなければ、火焰土器の種類がこれも一つ、これも一つというふうにはしか見えないかもしれない



- 王冠型土器 -

のですが、これも相容れないものがある、こういう約束があります。こっちはぐっと谷になって、こっちは平ら、そしてここには袋状、そういう約束事がある、これがまたおも

しろいのですけれども、両方とも同じような土器なのに、なぜ片方だけでよしとしないのか、なぜ相異なる二つを作らなければいけないのかというのが、これも縄文土器のもう一つの謎なのですが、これが火焰土器様式によく表れています。

縄文人というのはいつもおもしろいのですが、相対立するものを彼らは頭にいつもイメージするのです。それは火焰土器だけではないのです。夜と昼とか、男とか女とか、そういうものも全部こめられて重なって入っているのです。世界の自然民族には彼らそれぞれに分類体系というのがあるのですが、二つに分けて考えることが彼らの基本的な分類の仕方です。その分類は、ただ単に二つの種類を持つのではなくて、対立して相容れないものをいつもデザインの上にも表すということです。これは注目すべきことで、二つがあるからお互いにすたれないのです。向こうがやめたと言ったらこっちもやめるのですけれども、向こうが作っている限りはこっちも作り続ける、こっちが作っていると向こうも作る、この二つをどう使い分けていたのかは全く知ることはできません。だけど、この二つを持っているというのは、これだけじゃないところにいっぱいあります。例えば一つの村の広場を囲んで住居が南の方に展開する、北側に展開する、こういうふうに向き合う。それから、墓穴を掘る時に、長軸が東西と南北の二つの軸に分かれるとか、そういうことをずっと数え上げていったらもっとももっとたくさんあるのですけれども、私はそれで論文を書いたことがあります。そういう二つが対立するものを持っているというのが、実は我々の現代にも通じていまして、例えば早池峰山の麓には国指定の神楽があります。この神楽は二つあるのです。そして、一つの方はしづさが緩やかなのです。一つは勇壮・活発なのです。この二つがあるから今でも残っているのです。一つしかないところは後継者がいないとか何だとかで、それはそうなのでしょうけれども、全部だめになってきます。対立したものがあるということを彼らの世界の中にきちんと持っていて、いろいろなところにその思想を表現した。これが先ほど申しました世界観を表現しているということの一つは、そこにもあるのです。だから、火焰土器というものは訴える力があるのです。世界観がある。おとなしい弥生土器と違うのです。弥生土器をじっとみつめている人がいたらちょっとおかしいかと、ところが、縄文土器をずっとみつめている人がいたら、あいつはなかなかできるかもしれないとか、それぐらい警戒した方がいいぐらいレベルが違うのです。今日、お話を聞いていただいている皆さんは、全部ハイレベルの方に所属した方のように見えますけれども。

(豊口)

確かに縄文の時代、火焰土器を作っていた時代というのは、日本中が怨念の世界ではないけれども、どろどろした世界で、神を恐れる時代でもあったような気がします。弥生になりますと、平和な時代が訪れたという感じを土器から受けるのです。陰と陽の世界をこの時代の人たちはよく知っていたのではないかと、陰陽の世界、これは日本の宗教にも存在していますけれども、人々の生活の中にもやっぱり陰と陽の生活がはっきり刻み込まれているということがあると思うのです。その一番象徴的なのが、この火焰土器にあるのかなと私は感じておりました。

(小林)

それと、火焰土器もこれを見ると非常に均整がとれていて、隙がないです。ところが、突起を見ると、左右対称じゃないのです。一番大事なところで、見落としてはいけない。

左右対称ではないという点では王冠型もそうです。短冊形の左側に切り込みが入って、左右対称ではないのです。左右対称というのは非常に安定していて静です。ところが、左右対称でないというのは何か動こうとしている、動を感じるのです。動を左右対称じゃないというところに表現したというのも、これもなかなかにくい技ではないかと思います。

(豊 口)

造形物に動きがあるというのは、現代社会の芸術の世界にも共通していえることで、動きを感じない絵にしても彫刻にしてもだめなのです。やっぱり将来に対して何かのメッセージを送っているということは非常に必要になってきます。それがここで、今の館長のご説明ではっきりしましたけれども、そういうことをちゃんとわきまえて作っていたというのは大変なことだろうと思うのです。

日本人の感性として、私は人間と神の世界を分けて考える癖があるのです。例えば日本人というのは、おそらく日本だけだと思うのですけれども、太陽を直接見ないという、光の元を直接見ないという民族なのです。ですから、日本人はあんどん、提灯というもので必ず光源をカバードして、ソフトな光、それから太陽の光は障子で遮って、自分たちの生活圏の光はすべて間接照明として活用している。しかし、例えば神のお祭りの時にはたいまつを焚いて、光源が見えるようにする。それから、仏壇にはろうそくをともして光源を見る、神、仏の世界と人間の世界とは光というものをベースにして、まったく分けた空間として意識をしている。この光空間の区別というのは、日本人の一つのものづくりの感性としてもあるのではないかという気がするのです。これらは外国にはありませんから、戦後日本の場合、蛍光灯をつけて直接光を見ていますけれども、これらは日本人の育まれてきた感性とは全く逆のものだろうという気がするのです。間接照明の中で自分たちの生活にやすらぎを与えるという、これは一種の遊び心だと思うのです。そのすばらしい遊び心がこの時代に既に作られ始めていたのだなという気も私はしております。

そういうわけで、今日は館長にいろいろな角度から縄文時代、そして火焰土器、そして信濃川と火焰型土器を作った人たちの生活の内容等についてお話を伺ってまいりましたけれども、もし会場からご質問等がありましたらお受けしたいと思います。どなたかいらっしゃいますか。

(会 場)

両先生のお話は何回か承っております。また今日も新潟からまいりました。最初に、冒頭におっしゃいましたけれども、縄文時代に日本列島には5万人くらいの間人がいたのではないかというような推測をされましたけれども、今、話題に出ました馬高遺跡を見させていただきましたけれども、あの集落にはどのくらいの住民がいたのか、ご推測いただきたいと思います。

(小 林)

せいぜい5万人と言ったのは、縄文時代の前、だから始まる頃もその程度かもしれませんが、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期と増えては減り、平均すると右肩上がりが増えてきたというふうに見通しを立ててはいますけれども、一番盛りで30万を超えただろうと、50万くらいに近づいたかもしれない。これはアメリカの先住民、縄文人と同じように本格的な農耕を持たないで、例えばトーテムポールを立てた連中もそうなのですから、あれでも相当に人口密度の高い方です。そういうところと比べて、これは相当あて

ずっぽうなのです。仮定で、こうであれば、そしてこの場合はこうでというふうにいるる仮定を重ねての推測なので、堅い数字ではないのですけれども、縄文時代で多い時で 30 万から、しかし 50 万を超えないだろうと、その 30 万人を超えるという数はどういう数かと申しますと、今度市町村合併が進みまして、市町村の数がガタッと減りましたが、その前は日本全国の市町村の数はだいたい 3,300 あったのです。そうすると、越路町で平均 100、小国町で 100、長岡市で 100、そんな程度で、一番多かった時でもそういうものだろうと、津南町も 100、十日町も 100 という程度が全国に平均する。しかし、その中でどうも東日本の方がやや比重が高い感じで、西が少し密度が低いかもしれない、そういう見方で今あります。確固たる根拠は残念ながらまだないのですけれども、いろいろなものを参考にしながら、大ざっぱな見積もりをするとそんなものです。

一つの村ではどうかと言いますと、例えば火焰土器の第 1 号を出した馬高遺跡というのは、馬高だけではないのですけれども、縄文時代の安定した村で 10 軒そこそこで、おじいさん、おばあさん両方が頑張っていて、若夫婦がいて、子どもが 2 ~ 3 人いるということからいくと、まだいないのもいるし、おじいさん、おばあさんが欠けてしまったところもある。そうすると 50 人ちょっと。そして、長岡市に 100 人いますから、小国町に 100 人、与板にも 100 人いますので、そのあたりで適当な女と男がくっついて、一つできていたのではないかという程度です。ただし、そういう中でも馬高遺跡というのは、非常に安定した村でした。どういうことから安定しているかといったら、土器の様式が時の流れとともに変わってくるわけです。その変わっている段階が、例えば五つ以上あそこにずっと住み続けている。一つ 90 年くらいとしたら 450 年、450 年続いている村はこのあたりはありません。ただし、ずっといたかどうかは保証の限りではない。ただ、土器を見ていくと続いているのです。その間、いったんいなくなったり、それからまた戻ってきたり、しかし、あそこにこだわっていたのが、450 年はあそこにずっとこだわっていた。それが終わると、三十稲場遺跡という谷を一つ隔てたところに動くのです。これは三つか四つくらいの段階型式です。400 年近くそこにいます。そして、あそこから眺めて、お日様はどこから昇るか、どこに沈むか、それをみんな観察しているわけです。そして自分たちの風景を作るのです。風景というのは作るものなのです。その風景の中に生きておらが村さ、おらが国さという思いを育てていったと思います。

(会 場)

今のお話の中で、ちょうど私が中越地震の 1 か月ほど前に新潟大学に伺いまして、河岸段丘はこうだというようなことを教えていただきました。その後、1 か月ちょっとで大地震があったわけですが、そこに人間が住んでいたと、そうすると自然災害とか大雪だとかの場合に食べ物がなくなっていくますけれども、.....いろいろなことが推測できますけれども、実際に消滅というようなものも繰り返してきたのでしょうか。

(小 林)

具体的な細かいことは分かりませんが、自然は休みなく動いていますので、地震もあったし、火山も爆発しています。遺跡の中でちゃんと地震で断層ができて、そういうものが竪穴住居をずっと動かしているような例もありまして、地震もちゃんとあるのです。噴砂、砂を吹き上げますので、いつの時代にそこに地震があったかという災害も分かります。そういうこともあるのですけれども、現代の我々が災害から受ける打撃というのは、

人間が自分勝手に自然界にはないものを構築して造ったりしますが、それにイメージがいくのです。土手が決壊したり、棚田が壊れたりというのは、もちろん地滑りは縄文時代でもしょっちゅうあります。だけど、現代の災害の規模とは別に、被害というのはその時代、その時代の尺度があつてのことですので、そういうことから言うと、簡単に言ってしまうと、縄文人はそんなものはへとも思わないでしょう、融通無碍に今の我々よりはやれたと考えていいと思います。

(豊 口)

おもしろいご質問、ありがとうございました。他に。

(会 場)

今質問された方は新潟の方からおいでになったのですが、私は反対の上越からまいりました。小林先生のお話はいろいろなところでお聞きしていますが、今日はすばらしいお話を聞かせていただき、ありがとうございました。それで、お二人の対談をお聞きしながら、こんなことをメモしました。最初、眠っていたのですが、前半と後半と分けるならば、前半はちょっと休ませていただきまして頭の整理をしておりました。後半からいよいよ真剣勝負で、7ページにわたってメモいたしました。

何を言うかと言いますと、ロマンというお話をされました。ロマンというのは、私は理論的、論理的思考概念ではないと思うのです。つまり不可思議といいますが不思議、分からないというところにロマンがあるのではないのでしょうか。例えば私は既婚者ですが、女房が一人おりますが、いまもって分かりません。それは、私は男性であり、妻は女性であるからどうしても分からない。今朝も出かけに口げんかをしてまいりました。子どもはもう成人して離れていますので、あまり子どもの教育上の影響を考えないで二人でやっておりますけれども、つまり対立概念というのは、そういうことを認識したということは近代に入ってからであると、カントの二律背反にしても弁証法にしても、必ず正反、そして正反合、つまりいつまでも対立する概念で終わるのではなくて、そこに非常に深いものを感じ取ったのだらうと思います。けれども、いつまでも対立していくのではなくて、すべての人類の文明といいますが、洋の東西にかかわらず、必ず正反合によって文明というものが進歩してきたのだらうと私は認識しています。ですから、さっきロマンとおっしゃった方は、分からない部分があるから、何としても努力して分かりましょうということではないのでしょうか。ですから、ここには縄文人の研究者はおられると思いますけれども、あるいは縄文人の15,000人にわたる気持ちが分かりつつあると思うのです。ですから、私は感想だけしか申し上げられませんが、例えばデザインの問題、私たちは21世紀に何を残すことができるかと言いますと、やはり過去に遡って、そこから何か学び取ることが必要ではないでしょうか。

それから、最後に世界観の問題が出ました。全部対立概念、動と静、あるいは陰と陽、しかし、それを今の生き方を見ますと、グローバルゼーションで一極化しようとする流れがあります。私はこれは非常に危険だと思います。何か一つ、一色に染めてしまおうという大きなウェイブが動いている。最近の政治の世界、あるいは経済の世界、あるいは宗教の世界にもそういう動きが顕著になってまいりましたが、これは人類滅亡へのシグナルであると私は革新しております。

それと、もう一つ最後に申し上げますが、この縄文人の世界観とか宇宙観というのは、

神への恐れといたしますか、縄文人は自分が人間であるとも分からなかったと思います。つまり人間であり、神であった。しかし、自分以外の神秘的なものに対する、現象に対する恐れといたしますか、不安というものはあったと思います。けれども、私はそれに信仰しながら、人間の対立概念として神、あるいは仏でもいいのですけれども、そういう宇宙的な広大な考えの下で 15000 年生きてきたと思います。今よりももっと厳しかったと思います。決してロマンなんかありません。弥生、縄文ときますけれども、あるいは古墳時代と分類しておりますけれども、今よりももっと大変だったと思うのです。それを 15000 年も長きにわたって地球上に、あるいは日本列島に住み続けてきたということは大変驚きを感じると同時に、人間の生命力の偉大さに敬服するわけであります。

もう一つ最後に、数というものの神秘性、ゼロと 1、2、3 をつなげていきますと円になる、どちらも無限なのです。ですから、火焰土器のあれをちょっとこうやりますと無限となるのではないのでしょうか、8 という数字、そんなことがちょっと頭に浮かびましたので、お礼かたがた、ちょっと感想を述べさせていただきます。ありがとうございました。

(豊 口)

すばらしいご感想をいただきまして、ありがとうございました。もう一方、どなたかいらっしゃいますか、よろしいですか。

(会 場)

土器について言えば、日本の縄文時代というのは、質量とも特筆的なものであるというのは小林先生から聞いたところなのですが、火焰土器というのはさらに特徴的なものであると。したがって、ここにあったのだらうと、私は素人ですけれどもそう思っているのですけれども、国外というか、韓国とか中国とか、あるいはヨーロッパでも、日本の縄文土器に値するような時代は見ることはできるのですか、できないのですか。

(豊 口)

外国にその事例があるかどうかですね。

(小 林)

もちろん縄文時代には他の地球上のいろいろなところで、いろいろな地域に適応した生活を送っておりますが、縄文は縄文で非常に個性的です。例えば土器一つをとっても、世界中の土器は縄文土器と違って、このコップのように口が平らなのです。弥生土器もそうです。口が飛び出たり波打ったりするのは縄文だけです。非常に個性を持っていて、意外とこれは大事な特徴なのです。そういった意味で、縄文土器の時代は、並行する時代はいろいろなところにあって、それぞれに個性があるけれども、その中でも個性を見いだしていくというのが、より本体に迫ることが可能ではないかと思います。

(会 場)

つまり世界的に見ても、かなり特徴のある時代だと。

(豊 口)

私からちょっとお話し申し上げますけれども、例えばインカ文明というのがありますが、あそこの土器にしても、ヨーロッパ地中海文明の土器にしても、周りにこれだけの装飾性のある土器というのはないのです。全部館長がおっしゃるようにフラットです。とにかくこれしかないということは、私の短い人生の中でヨーロッパ、インカ、南米その他見てまいりましたけれども、まずないです。ですから、とにかく独得のものだと思うのです。私

はこれを見て感じたのですけれども、先ほどお話がありましたように、神の世界に対する祈りだと思うのです。人間として神に何かを伝えたいという気持ちがこの土器を生んだのだろうと、祈りの世界から生まれたものだろうと思います。なぜそういうことを申し上げるかと言うと、私は祈りで長岡の町ができたし、新潟県もできた、越後の国はすべて祈りだったと思うのです。農作物にしても神に対する感謝で、祈りで育まれてきた。それから、豊かな水の世界に対する祈りもあったし、そして暴れ川が静まってほしいという神に対する祈りでもあったし、過酷な生活の中で自分たちの生活を安定させてほしいという神に対する願いでもあったかもしれない。長岡の花火も単なるお祭りの花火ではなくて、亡くなった方に対する祈りとして花火が行われている。世界でも類がない花火だと思います。今日のお話しもこれはやっぱり祈りだと思います。そういう祈りの世界というのは、どういうことかと言いますと、すべてのものに感謝しながら、そして新しい明日という時代を自分たちの力で作っていく可能性を自分たちで生み出したいというのが、私は祈りだと思うのです。そういうものを今日は皆さん方のご意見の中からも私は受けましたし、それから今日、時間を割いて来ていただきました小林館長のお話の中から、古代人が何を考えていたかということが実によく分かった。こういうことを我々はこれから一つのキーワードとして心の中に刻みつけながら、次の時代を作っていく使命があるのではないかという気がいたしております。今日は館長、ありがとうございました。では、これで終わりたいと思います。

(司 会)

小林先生、豊口先生、ありがとうございました。皆様、お二人に盛大な拍手を今一度お願いいたします。

以上をもちまして、「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』第9回講座」を終了いたします。本日は、長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。お帰りの際にはお忘れものがないようにお気をつけください。